



生き生きとした自分を見つめるための実用生活誌

はじまりのページ

Shukokai-Magazine The page of beginning

2024 Spring NO.65

ダイジェスト版

新春特集

—患者様の負担を減らし、治療効果を高めるために—

HASUMI免疫クリニックが 着手する 2+1の新治療

第2特集

—技術移転が2か国で開始—

世界に広がる HITV療法のがん治療

—患者様の負担を減らし、治療効果を高めるために—

HASUMI免疫クリニックが 着手する 2+1の新治療

HASUMI免疫クリニックでは、がん治療はいうまでもなく、人々の健康・長寿に資する研究・開発を日夜続けていますが、今年その一端が実際の臨床へ導入できる運びとなりました。今回は新春特集として、それらの新治療について米国法人蓮見国際研究財団理事長の蓮見賢一郎先生、HASUMI免疫クリニック事務長の渋谷大介氏のお話をもとに解説します。

がん腫瘍が育つ環境を作る細胞

線維芽細胞とは、結合組織を構成する細胞のひとつです。結合組織とは細胞が構造的・機能的に集まったもの——。体を支えたり、体内のさまざまな部分の形を維持したり、隙間を埋めたりといった多様な働きをする線維を指します。

New Therapy 新治療 1 せんい が 線維芽細胞療法

～がん治療&アンチエイジング～
健康で美しい加齢を実現させる～

この線維芽細胞は組織のがん化過程において性質を変化させて、腫瘍の進展（広がっていくこと）や薬剤抵抗性^{※1}に関与することが分かっています。「線維芽細胞が、がん腫瘍が育つための環境作りをしているということですよ」と、蓮見先生は語りました。「つまり、腫瘍の線維芽細胞を弱体化させれば（腫瘍の）進展も抑

※1 薬剤抵抗性：薬剤の過剰・不適切な使用により、その薬剤の薬効が低下してしまうこと。薬剤耐性ともいう

“光陰矢の如し”の数式

蓮見賢一郎 医療法人社団 珠光会 理事長

令和6年1月1日に発生した能登半島地震により犠牲になられた方々のご冥福をお祈りすると共に、被災された方々にお見舞い申し上げます。被災地域のみなさまの安全確保、一日も早い復旧・復興を心よりお祈り申し上げます。

辛い空気で幕を開けた2024年も、あっという間に2月。もちろん、「まだ2月じゃないか」とおっしゃる人もいますが、どうやら時間に対する捉え方には年齢的な差異があるようです。

『ジャンネーの法則』という言葉聞いたことがあるでしょうか。これは19世紀に活躍したフランスの哲学者ポール・ジャンネーが提唱した法則で、時間の心理的な長さは、年齢の逆数に比例する^①というものです。つまり、若ければ若いほど時間の経過は遅く感じ、年をとればとるほど早くなる、というわけです。

1歳の時の心理的な1年を100%とした場合、10歳の時の1年は1歳の時の10%、20歳では5%、50歳では2%、70歳では、なんと1・42%にまで短縮してしまう——。光陰矢の如し^②という言葉がありますが、極端な言い方をすれば、『ジャンネーの法則』を示すY（心理的な時間）= 1/n（年齢）という数式こそ、この格言の正体なのかもしれません。

『ジャンネーの法則』に科学的な根拠はありませんが、体感的・心理的には肯定的な人が多いのではないのでしょうか。この法則を破り、短くなった時間を再び伸長させるヒントは、実はフィジカルな側面にあるのかもしれない。

日本の心理学者・一川誠教授（千葉大学）は、心理的な時間に影響を及ぼす要因の一つに、身体的代謝^③を挙げています。例えば、サッカーのシュートの瞬間や、ゴルフのバックスイングからインパクトの間など、極度に集中しているときの1秒は、日向ぼっこでボーっと寝転んでいるときの1秒に比べて、長く感じる^④ことは、経験的に理解できるのではないのでしょうか。

もし心理的時間に身体的代謝が関わっているなら、『ジャンネーの法則』を破るカギは、毎日ドキドキすることかもしれません。行ったことのない場所を散歩する、新しい趣味を始める、疎遠になつていた人にメールする……。ひとつひとつは小さなドキドキかもしれませんが、つながれば日々は大きなドキドキに彩られるでしょう。それがその身体的代謝を上げ、幸福感に満ちた時間を延長させるコツなのかもしれません。

珠光会も患者様に少しでもときめきを感じていただける医療を提供できるよう、日々精進する所存です。今年もご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

CONTENTS

2 思いの言の葉 Vol.59
“光陰矢の如し”の数式

3 新春特集
—患者様の負担を減らし、治療効果を高めるために—
HASUMI免疫クリニックが着手する
2+1の新治療

8 Special Interview
患者様に寄り添って
治療を目指す

10 第2特集
—技術移転が2か国で開始—
世界に広がる
HITV療法のがん治療

13 連載コミック
第60回 ほのぼのJiJi・BaBa 松 & 梅

14 Report from Hokkaido
蓮見賢一郎先生が札幌で講演
～HITV療法の要点を専門家に解説～

16 珠光会通信

えられるわけですから、その分治療がやりやすくなるわけです。

現在、線維芽細胞を抑える抗体薬はあるにはあるのですが、薬効が腫瘍に限らず全身に及んでしまうので使用できません。免疫機能に異常が生じ、膠原病などを発症する可能性があるからです」(蓮見先生)

膠原病は、免疫システムが誤って自分の組織を攻撃してしまう「自己免疫」によって引き起こさ

れる病気の総称で、具体的には「関節リウマチ」「全身性エリテマトーデス」*2などです。共通する症状には関節の腫れやこわばり、痛みなどがあげられます。

「免疫システムを誤作動させることなく局所的に線維芽細胞を抑制するには、必要に応じて必要なだけの薬剤を病巣へ送る、ド

ラッグデリバリーシステム(Drug Delivery System: DDS)、という技術が不可欠です。

しかし、線維芽細胞に対するDDSは研究段階にあり、実際に臨床の場で使用できるのは、もう少し先になるでしょう。ただ、

線維芽細胞自体はとても有益性が高いので、がん治療と並行して進めているのがアンチエイジングへの利用です」(蓮見先生)

皮膚の内側から 瑞々しい細胞を作り出す

先に述べたように、体内のさまざまな部分を形成する線維芽細胞は、皮膚の真皮に多く存在し、肌を構成する3大要素である「コラーゲン」「ヒアルロン酸」「エラスチン」やタンパク質を産出。同時に古くなった各要素を分解し、それらを再構築することで真皮の組織を常にリフレッシュしています。

この肌の3大要素は加齢とともに減退・減少するた

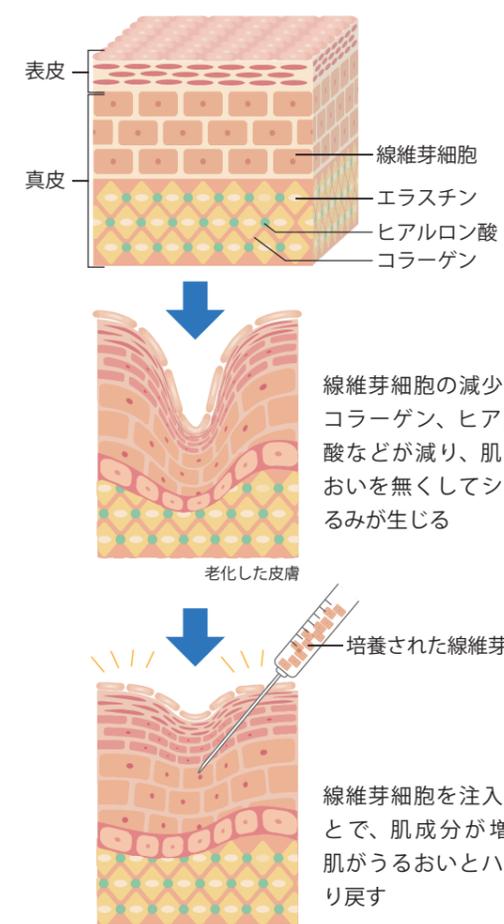
め、肌は弾力性を失って、シワやたるみなどの老化現象が発生してしまうのです。

「皮膚を老化現象から回復させるには、昨今では整形外科的な処置やサプリメントなどさまざまな方法がありますが、根本的かつ効果的なのは、線維芽細胞療法*2ではないでしょうか」(蓮見先生)

線維芽細胞療法は、再生医療のひとつで、患者様の皮膚から採取した線維芽細胞を培養室で培養し、シワやたるみなど気になる部位に移植するというもの(図1)。皮膚の内側から瑞々しい細胞が湧き出すので、持続的なアンチエイジングには、最適な方法と言えるのではないのでしょうか。

「皮膚採取は10分程度、麻酔を 사용합니다ので、基本的に痛みはありません」そう説明してくれたのは、H A S U M I 免疫クリニック事務長の渋谷大介氏です。「細胞の培養は、最新設備と熟練のスタッフを擁する蓮見再生医療研究所で行います。」

図1 線維芽細胞療法の仕組み



線維芽細胞の減少に伴いコラーゲン、ヒアルロン酸などが減り、肌がうるおいを無くしてシワやたるみが生じる

線維芽細胞を注入することで、肌成分が増加し、肌がうるおいとハリを取り戻す

同研究所は60年以上も細胞培養に携わっているので、とてもスベックの高い移植細胞を作製することが出来ます。

移植に要する時間は1時間程度ですが、この場合も麻酔を用いますので、痛みは原則的に感じないでしょう」(渋谷氏)

「線維芽細胞療法に関しては、特定認定再生医療等委員会の審査を経て、厚生労働大臣の許可が下りれば、今春より治療を提供できると思います。」

内閣府の発表によると、日本人の平均寿命は今後も進展して、2060年には男性が84・19歳、女性が90・93歳になるといわれています。健康寿命を延ばすという意味でも、医学的なアンチエイジングは益々重要になっていくに違いありません。

がん治療を通じ、健康全般のQOL (Quality Of Life) 生活・生命の質)向上を目指す珠光会にとっても、アンチエイジングは重要な課題と言えるでしょう」(蓮見先生)

New Therapy 新治療2 骨髄由来 自己幹細胞療法

～患者様の負担を大幅に減らす技術～



米国法人蓮見国際研究財団理事長 蓮見 賢一郎先生

すメカニズムは、3つあると考えられています。

1つ目は「ホーミング効果」。幹細胞が自ら損傷部分を探し出し、そこへ移動して修復を行うというメカニズムです。2つ目は、修復部分の近隣部位を修復するという「パラクライン効果」。3つ目は、離れた損傷部分を修復する「エンドクライン効果」です(図3)。

ICVS Tokyo Clinic V2では、幹細胞治療を、主に放射線の副作用や疼痛など、がん治療の後遺症を治療するためにスタートさせましたが、現在では先ほど申し上げたアンチエイジング的な観点から、美容医学としての施術も行っています」(蓮見先生)

新しい組織を再生させる幹細胞

幹細胞療法は、2020年よりICVS Tokyo Clinic V2で開始された再生医療です。

幹細胞とは失われた細胞を再度生み出し、補充する能力を持った細胞です。皮膚・赤血球・血小板などさまざまな細胞を作り出す「多分化能」、及び、自分とまった

く同じ能力を持つ細胞に分裂する「自己複製能」という2つの能力を有しています(図2)。例えば、私

たちが怪我などの損傷を負ったときは、そのダメージから回復するのは、幹細胞が新しい組織を再生してくれるおかげ。また、古い細胞が新しい細胞に入れ替わる、新陳代謝も幹細胞の働きによります。「幹細胞治療はまだ研究途上にあ

*2 全身性エリテマトーデス: 全身のさまざまな臓器に炎症や組織障害が生じる病気。指定難病のひとつ

み合わせて完成する骨髄由来自己幹細胞療法は、珠光会グループの技術の結晶と言っても過言ではありません」(渋谷氏)

がんのIV期、及び進行がんの治療のために開発された次世代型免疫療法——HITV療法では、フレッシュな樹状細胞を直接がん腫瘍に送り込むため、極細の針を有した注射器が用いられます。10000例を超える施術によって磨き上げられた蓮見先生の経験と技術だからこそ安心の治療法と言えるでしょう。

「この骨髄由来自己幹細胞療法も線維芽細胞療法と同様に、特定認定再生医療等委員会の審査を経て厚生労働大臣の許可が下りれば、今春より治療を提供することができま

きます。

検体を採取する負担が軽減されることで、根本的なスキンケアや疼痛緩和治療が、一層受けやすくなるでしょう」(蓮見先生)

図2 人間を構成する“細胞”の分類

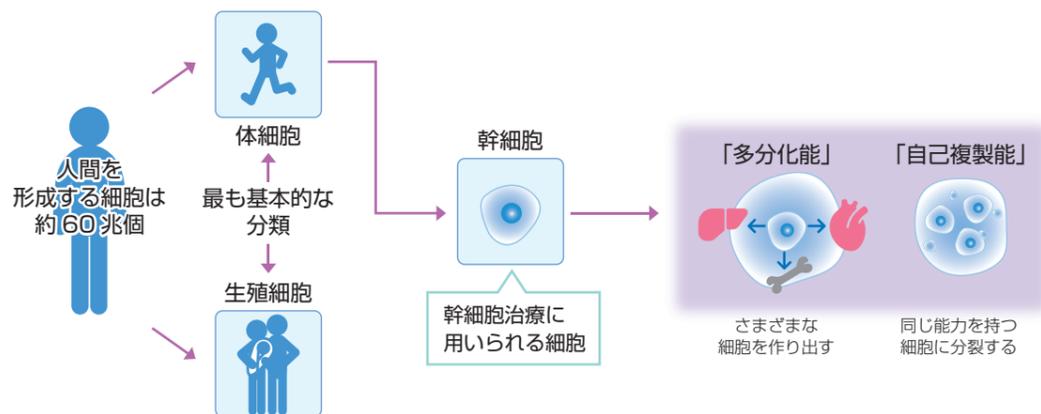
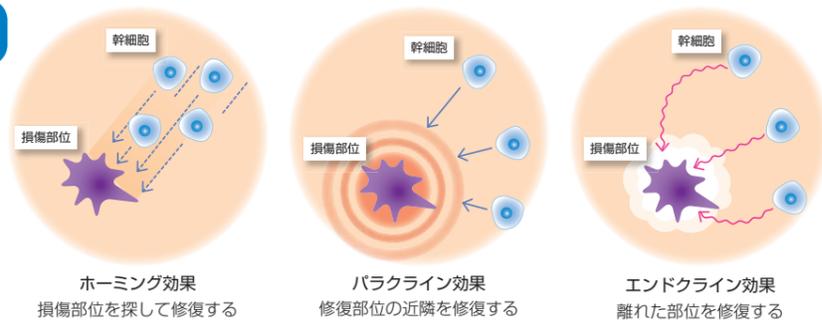


図3 幹細胞が再生などを促すメカニズム



New Therapy 新治療 +1 骨髄から樹状細胞を培養する

～HITV療法がより手軽に受診できるようになる～

HITV療法の技術を応用

幹細胞にはEGF(上皮細胞増殖因子)などの成長因子が500種類以上、エクソソーム(組織や臓器の情報伝達物質)など生理活性物質が大量に含まれているため、疼痛緩和以外に皮膚疾患の改善やスキンケアにも効果が期待されているのです。

「幹細胞療法に用いられる幹細胞は、多くの場合、ご自身の脂肪から培養された、脂肪由来自己間葉系幹細胞」です。

脂肪採取するためには、臀部や大腿部から切開・吸引などによって脂肪組織を摂取する必要がありますが、この施術に要する時間・手間を短縮することが可能になる新しい治療が、骨髄由来自己間葉系幹細胞療法」です。

文字通り骨髄から幹細胞を培養する技術で、これにより患者様の負担を格段に軽くすることができます」(蓮見先生)

「骨髄由来自己幹細胞療法が一般に普及していない理由は、骨髄採取と細胞培養が脂肪組織の採取や培養より難しいからです。

骨髄採取というと、特殊な太い針を使用した骨髄生検を思い浮かべ、怖いと感じる方もいらっしゃるかもしれません。しかし、HASUMI免疫クリニックでは、通常の注射器を使用して、施術時間も30分程度です。

これは蓮見先生がHITV療法で研鑽した穿刺スキルがあつてこそ可能な手技で、この技術により脂肪採取よりも患者様の負担を少なくすることができます。

さらに、長年培ってきた、蓮見再生医療研究所」の培養技術を組



HASUMI免疫クリニック事務長 渋谷 大介氏

取し、その血液を遠心分離。治療に必要な樹状細胞と活性化T細胞のもととなる単核球、細胞培養に必要な血漿を採取して、残った血液をもう一方の腕の静脈から体内へ戻す——この一連の工程を指します。

「アフエレーシスは2〜3時間かかるので、その間患者様には、ご負担をおかけしていると思います。

しかし、現在珠光会が研究・開発を進めている、骨髄から樹状細胞を培養する」技術が実用化すればアフエレーシス自体が不要になるので、HITV療法をより手軽に受診していただけるようになるでしょう。臨床の場に登場するのは少し先になりますが、必ず実現させたいと考えています」(蓮見先生)

HASUMI免疫クリニックが導入を進める「2+1」の新治療は、患者様により効果的な治療を快適に受けていただきたいという願いが形になったものに他なりません。

HASUMI免疫クリニック、及び関連各医院を受診してくださる患者様がいる限り、珠光会グループの医師、スタッフ、研究者が努力を怠ることはありません。

アフエレーシスが不要になる

HITV療法には「アフエレーシス」が不可欠です。アフエレーシスとは血液を遠心分離し、特定の血球や血漿を取り出す処置のこと。具体的には、片腕の静脈から血液を採

Special Interview

患者様に寄り添って
治療を目指す

蓮見賢一郎先生（米国法人蓮見国際研究財団理事長）のご子息である蓮見淳医師は、東京慈恵会医科大学付属病院の放射線科に在籍しながら、5年ほど前よりICVS東京クリニックの非常勤医師として勤務——。昨年9月から正式にICVS東京クリニックの副院長に就任し、さらに、今春より院長に就任する予定です。ICVS東京クリニックの未来を担うといっても過言ではない蓮見医師に、今後の展望などを伺いました。



ICVS 東京クリニック
蓮見 淳 副院長

実践的に学ぶにはベストな環境

「ご尊父である蓮見賢一郎先生が、ご祖父様の蓮見喜一郎博士より珠光会を継承したのは1988年。そして、約36年の時を経て蓮見淳医師が次世代の担い手としてICVS東京クリニックに着任されたわけですが、免疫療法のパイオニアとしての系譜を継ぐにあたり、プレッシャーは感じませんか？」

蓮見医師「大きなプレッシャーを感じていません。父も祖父から世代交代するとき、重圧を感じたといっていました。」

父はスタッフの皆さんや患者様が後押ししてくれたからやってこられたと語っていますが、私もみなさまに支えていただけるような医師になれるように努力したいと思っています」

「蓮見医師は、喜一郎博士にお会いになったことはあるのですか？」

蓮見医師「残念ながらありません。父の話や資料でうかがい知るのみですが、強い信念とバイタリテイの持ち主という印象ですね。先駆者として貴重な経験をお持ちでしょうから、直接話を聞いたら吸収できる

に達したいと願っています」

「ICVS東京クリニックを牽引していくにあたり、抱負などがありましたらお聞かせください。」

蓮見医師「某有名IT企業でAI（人工知能）の開発をしている人物が、人間が開発したテクノロジーは加速度的に変化している」といっていますが、それらの変化は医学界でも同じです。特に免疫療法はまだ日が浅い分野であることから、解明されていない部分も多く、今後新しい発見が次々に登場するでしょう。

臨床医として大切なのは、そうした新たな知見を、実践の場に柔軟に取り入れていくことだと考えています。幸い珠光会はアメリカやヨーロッパなどの大学、研究チームと交流がありますので、常にアンテナを張り巡らせて有益な情報をキャッチし、患者様のQOLを向上させるように治療を進歩させたいと考えています。

とはいえ、さきほども申し上げた通り、臨床医学において、患者様とのコミュニケーションが重要な要素であることは間違いないと思います。私も患者様にとっての良いシエルパになれるよう努力し続けたいと思っています」

こともたくさんあったらうなと思います」

「免疫療法をリードする家系に生まれた蓮見医師にとって、同療法は身近な治療体系だったのでしょうか？」

蓮見医師「もちろん、父の仕事ぶりは家族の一員として見ていましたが、免疫療法の知識は、ほとんどありませんでした。ですので、今懸命に勉強しています。」

「本当は大学院などで研究に励みたいところですが、時間の関係でそうもいきません。ただ、傍らに最良のお手本がいてくれますので、実践的な学びにはベストな環境が整っていると思っています」

大切なのは
患者様とのコミュニケーション

「最良のお手本として、蓮見先生とはどのようなやり取りを行っているのですか？」

蓮見医師「先端的な免疫療法の知識や技術を教えてもらうことはもちろんですが、私がかね。今もつとも学びたいと思っ

ているのは、患者様とのコミュニケーションの取り方です。父が患者さんを診察するとき、（患者さんの了解を得て）見学させていただくことが

あるのですが、患者さんは本当に父を信頼

して——。私は未熟ではありますが、患者様に信頼していただけることが医師冥利といえますか……（医師にとって）もっとも嬉しいことだということにはわかり

ます。私もいつかみなさまに信頼していただけるように頑張りたいと思っています」

「以前、蓮見先生は、患者様と医師の関係を『登山家とシエルパ』に例えたことがあります。」

シエルパとは、一般的にはヒマラヤの現地人登山ガイドを指します。登山家の荷物を背負い、傍らに寄り添いながら山岳を踏破するための最善の道をガイドするシエルパの姿が、がんを治療させるといふ共通の目的を成し遂げるために、治療の道程を歩む医師と患者様の在り方に重なったのでしようね。

蓮見医師「そうですね。患者様に寄り添う姿勢が大切なのだと思います。（患者様の）前に立って手を引くのではなく、後ろから背を押すのでもなく、傍らに立って同じことを感じ、同じ思いを共有しながら治療を進める——。」

「高い治療技術と精神性が必要な姿勢だと思いますが、自分もいつかそういった領域

Malaysia

—技術移転が2か国で開始—

第2特集

世界に広がる HITV療法のがん治療

HITV療法はこれまで中国、台湾での技術移転が行われてきましたが、2024年からマレーシアとブルガリアで新たな技術移転を実施する運びとなりました。両国でスタートする新プロジェクトについて、米国法人蓮見国際研究財団理事長・蓮見賢一郎先生にお話を伺いました。

Bulgaria

In Malaysia

マレーシア国民大学で臨床試験 ●免疫療法の橋頭堡きょうとうぼ

最初に、なぜマレーシアで HITV療法ヒットブ療法の技術移転を行うことになったのか、その経緯からお聞かせください。

蓮見先生「ICVS東京クリニックでは、10年ほど前からマレーシア国民大学（以下UKM）血液内科のエス・ファデーラ・アブドゥル・ワヒード教授とともに、悪性リンパ腫に対してHITV療法ヒットブ療法の臨床試験を行ってきました。

それらの実績を踏まえ、新設されるUKM附属のがんセンターで、肺がんや婦人科系がんなど、悪性リンパ腫以外の患者さんに、HITV療法ヒットブ療法を受診していただけるようになったのです」

具体的には、どのような計画があるのでしょうか？

蓮見先生「UKMと共同でがんセンターの運営を事業化し、この事業体の中で、ICVS東京クリニック

クは、HITV療法ヒットブ療法の技術指導を担当します。

実際の治療はUKMの医師と病理学の研究者、免疫学研究室が一体となって対処することになるでしょう。

がんセンターの拠点となる建物は、すでに完成しています。実際の治療が始まるのは、夏頃になる予定です」

—HITV療法ヒットブ療法はがんの第4期、進行・再発がんを治療するために開発された免疫療法です。

普通、免疫療法はがんの予防や1期、2期など比較的深度の浅いがんの治療に、補助的に用いられてきたような印象がありますが、HITV療法ヒットブ療法と他の免疫療法とは、どんな違いがあるのでしょうか？

蓮見先生「最大の相違点は、従来の免疫療法が全身に対して作用する『全身療法（全身制御）』であるの



蓮見先生（前列・左）、マレーシア国民大学教授のファデーラ氏（前列・中央）、米国メリーランド大学教授のディーン・マン氏（前列・右）

に対し、HITV療法ヒットブ療法は手術や放射線と同じく、がん腫瘍とその周囲に集中的に作用する『局所療法（局所制御）』だということですね。——**そもそも治療のコンセプトが異なるということですね。**

蓮見先生「HITV療法ヒットブ療法のポイント
は、CT（コンピュータ断层撮影）で確認しながら、がん腫瘍に直接樹状細胞を投与して腫瘍を『ワクチン化』することです。

腫瘍のワクチン化とは腫瘍その

ものを、がん細胞を攻撃する免疫細胞——『キラーT細胞』を製造する『バイオ工場』に変容させることを指します。

キラーT細胞は腫瘍から血液へ移動し、血中を移動しながら転移の元となる『微小がん細胞』を殲滅せんめつします。

この『血液の浄化』が行われれば、転移の確率がぐんと減るので、あとは原発巣を処理すれば、治療への可能性が一気に高まるということですね

—**外国の、しかもまったく新しい施設に（HITV療法ヒットブ療法を）導入するにあたり、何か難しい点はあるのでしょうか。**

蓮見先生「現在、UKMから治療内容について、さまざまな質問が寄せられています。それらを踏まえ、運用の打ち合わせのために、近々渡馬とま（マレーシアへ行くこと）する予定です」

——**具体的には、どんな質問がきているのでしょうか？**

蓮見先生「例えば、HITV療法ヒットブ療法の

In Republic of Bulgaria

ブルガリアで共同研究が始まる

●定期講演会が育てた友好

ブルガリア共和国は、バルカン半島東部に位置する東ヨーロッパの国です。同国で行われるHITV療法ヒットブ療法の技術移転について、

まず経緯からお聞かせください。

蓮見先生「約20年ほど前、当時ブルガリアの駐日大使を務めていたブラゴベスト・センドフ氏と出会っ

Dの難しさは、治療計画を立てることにあります。事前生検、解析の上で、個人に適した治療計画を立案する必要があります。マレーシアでも運営が軌道に乗るまでは、私が直接治療計画を立てる必要があるでしょう。

治療に要する細胞の培養については、当面はUKMの大学内で行い、それをがんセンターへデリバリーするという流れですが、将来的には培養に関する諸案件も、がんセンター内で完結させる予定です」

—**UKMのがんセンターは、マレーシアにおける免疫療法の橋頭堡きょうとうぼというわけですね。**



蓮見先生（中央）、プレヴェン医科大学学長のドプロミル・ディミトロフ氏（左から3番目）、駐日ブルガリア共和国大使のマリエタ・アラバジエヴァ氏（右から2番目）

たことが発端です。
セントロフ大使は、日本の大学でも何度か教鞭をとったことがある優れた数学者ですが、HITV療法に興味を持った彼が、ブルガリアの元厚生大臣で首都ソフィア

にあるがんセンターの所長だったチェルノゼムスキー博士と、感染症研究所の元所長ボグダン・ペトルノフ氏をICVS東京クリニックの施設見学に派遣したのです。そのお二人もHITV療法に関心を持ったことを契機に、ブルガリアで公益財団「蓮見国際研究財団ブルガリア」を設立しました。理事にはブルガリアの腫瘍学の権威にも入っていただきました。また、財団関係者の要請で、国立プレヴェン医科大学で定期的な講演を行うことになり、毎年秋にブルガリアへ赴くことになりました。プレヴェンは同国第2の都市であり、国立プレヴェン医科大学は国内有数の医科大学です。長年交流を続けるうちに、国立プレヴェン医科大学のスラブチョ・トモフ学長をはじめ、大学の関係者もHITV療法について興味をもつようになり、2023年10月に正式に技術移転の契約を完了しました。蓮見国際研究財団ブルガリアと国立プレヴェン医科

大学の共同臨床研究という形になります」
——実際にブルガリアでHITV療法が施術されるためには、どういったことが必要になるのでしょうか。
蓮見先生「ブルガリアはEU（欧州連合）加盟国ですので、医療・医薬品に関してもEUのルールに従う必要があります。臨床試験などについては、現在国立プレヴェン医科大学と相談していますが、HITV療法に用いる薬剤はすでにEUで承認されています。それらを組み合わせることに対して臨床試験が必要かどうか——ということですが、ICVS東京クリニックにストックされた1500例を超える症例を関係機関へ提出し、キャッチボールを行うことになるでしょう。少し時間はかかるかもしれませんが、まずは今年、プレヴェン国立大学附属病院の事務長クラスと培養の主任クラス、医師らが来院する予定ですので、彼らの研修がスタートとなるでしょう」

◆ ◆
——HITV療法がブルガリアからヨーロッパ各国に広まることも考えられると思いますが。
蓮見先生「東ヨーロッパはブルガリアから、そして、西ヨーロッパの拠点はドイツだと考えています。ドイツは言うまでもなく医療先進国ですが、現在ミュンヘンから100キロぐらい北にあるバイエルン州・エアランゲン大学の元医学部長シューラー氏と一緒に臨床試験の準備を進めています。シューラー氏は大学を定年退職しましたが、ヨーロッパでは樹状細胞の研究者として著名な方です。また、昨年末には米国・ペンシルベニア州のジェファソン大学への技術移転が決定しています」
——HITV療法が世界中に広がっているということですね。将来的には逆輸入のような形で日本にも広がっていくかもしれません。今後の展開を期待しております。

小林 裕美子

マンガ家/イラストレーター
東京造形大学・デザイン学科卒業。イラストレーターとして、実用書や児童書、雑誌、WEB媒体、新聞等に挿絵やマンガを描いている。『美大デビュー』（ポプラ社）、『もち・ぼち』（徳間書店）、『親を、どうする?』（実業之日本社）、『私、産めるのかな?』（河出書房新社）、『親が倒れた!桜井さんの場合』（新潮社）、『産まなくてもいいですか?』（幻冬舎）等、著書多数。

予報

明日は曇りの予報です

来週はいよいよ桜前線陸です

あなたの予報はよく当たるわよね

じゃあ私のところにいつ春がくるか教えてください

その予報は…難しいなあ

気象予報士

ほのぼのJiJi・BaBa 松 & 梅



お別れ

やっと学校が決まって長く住んでいた部屋ともお別れだ

壁の汚れを見ると色々な想い出が巡るな

机の跡

本棚の跡…

これは…?

引きこもっていた時の跡

お別れできてよかったね…

引越

梅ばあ

松じい



蓮見賢一郎先生が 札幌で講演

「HITV療法の要点を専門家に解説」

壁を打開させた「樹状細胞」

一般社団法人日本先制臨床医学会は、2018年4月に設立された先制医療^{※1}、先端医療、統合医療分野の学術交流・情報交換の「場」です。蓮見賢一郎先生が招聘されたのは、2日通しの学術大会の初日。会場となったANAクラウンプラザホテル札幌の会議場は、登壇を前にすでに多くの参加者であふれていました。

蓮見先生が解説されたのは、2005年より臨床を開始したHITV療法の仕組みと現状について……。参加者はほとんどが医療関係者であり、免疫療法に造詣の深い医師も多数いらっしゃいました。しかし、免疫療法の日本におけるパイオニアといえる珠光会診療



講演会風景

ごった返したといいます。がん治療における免疫療法の可能性を見出した蓮見先生は、LAK療法などの養子免疫療法や、さまざまな療法を実践しましたが、がんの消滅・縮小まで至ったケースは稀で、科学的根拠となる結果の再現性にも乏しかったといいます。

「こうした状況を打開する鍵となったのが『樹状細胞』でした。実際に樹状細胞の誘導を開始したのは1994年頃……。しかし、なかなか思ったような効果が出ません。そんなとき、幸運にも米国ロックフェラー大学のラルフ・スタインマン教授（2011年にノーベル生理学・医学賞受賞）の知古を得て、のち

昨年の10月7日（土）・8日（日）の両日、北海道・札幌市で、一般社団法人日本先制臨床医学会主催の「学術大会」が開催されました。

その初日の特別講演に蓮見賢一郎先生（米国法人蓮見国際研究財団理事長）が登壇され、次世代型免疫療法——HITV療法の要点を解説しました。大きな反響を呼んだ講演の概要をご紹介します。

所（現HASMIMI免疫クリニック）時代から蓄積された知見を、蓮見先生独自の発想で飛躍させ、さらに多数の臨床によって裏打ちされた「HITV療法」には興味を掻き立てられたようで、全員が蓮見先生の説明に耳目をそばだてました。

「私も珠光会の礎を築いたハスミワクチンの臨床が始まったのは1948年……今から75年ほど前でした」

蓮見先生は、まず珠光会における、言い換えれば日本における免疫療法の歴史について触れました。

珠光会診療所の初代院長である蓮見喜一郎博士（蓮見賢一郎先生の尊父）が生み出したハスミワクチンは、がんに対するワクチン療法という、現在の免疫療法の基本概念が一般化されるは



米国法人蓮見国際研究財団理事長

蓮見 賢一郎先生

※1 先制医療：予防医学の一種。何も症状がない段階（未病期）から個人の生体情報を調べ、将来起こりえる病気を推測、診断し、予防しようというコンセプト

のHITV療法につながるアイデアを得ることができたのです」

炎症を抑制して効果を高める

HITV療法が他の免疫療法と一線を画する点は、樹状細胞の腫瘍内投与^{※2}です。他の免疫療法が血管内投与を主流にしているのに対し、HITV療法は原則的に直接腫瘍内へ投与することで、樹状細胞にダイレクトにがんの情報学習させ、より精度の高いCTLを誘導することに成功したのです。

「樹状細胞の腫瘍内投与はがんに対して強い攻撃力を持っていますが、だからこそ注意を要さねばならないのが『炎症反応』です。炎症が生じると、症状が一気に進展する場合がありますからです。

この炎症に対する抗体薬を樹状細胞に併せて投与することで、炎症を抑制しつつ腫瘍を縮小、あるいは消滅させる道筋が見えてきたのです。これがHITV療法のプロトコールドです」

HITV療法にはプロトコールAからDまで4通りの方法がありますが、2021年12月に導入された最新の治療法が、樹状細胞の腫瘍内投与と炎症抗体薬を併用するプ

ロトコールド……。 「プロトコールドの登場により、放射線治療や抗がん剤治療の制約（施術回数など）を受けずに、腫瘍のワクチン化（11頁参照）による局所療法が可能となりました。同時に、治療を効率化、費用を削減することもできました。免疫療法は、すぐに結果が出るわけではないので、費用がかさむケースもあります。プロトコールドにより、患者様のご負担を軽減することが可能になったのです」

プロトコールドの臨床が始まり約1年、治療実績は80例を超えるまでになりました（2023年10月現在）。日本人が一生のうちでがんと診断される確率は男性65・5%、女性51・2%と言われていています（国立がん研究センター・2016年のデータに基づく）。副作用がほとんどなく、手術など他の療法とも相性がいいHITV療法プロトコールドが、がん治療に占める重要度は、今後ますます高くなっていくに違いありません。

◆ ◆ ◆ 蓮見先生が講演を終えた瞬間、場内は盛大な拍手に包まれました。免疫療法の未来を提示した講演会は、希望の名残を漂わせながら幕を閉じました。

※2 養子免疫療法：体内から活性リンパ球や樹状細胞などの免疫細胞を取り出し、体外で培養しながらがん細胞に対する攻撃力を高め、再び体内に戻す治療法のこと

※3 CTL：細胞障害性T細胞。ヘルパーT細胞の指示を受け、人体にとっての異物（がん細胞、ウイルス感染細胞等）を認識し、それを破壊する細胞

珠光会通信

Shukokai Communication

Information

「ディスペンサー(カートリッジワクチン専用注射器具)」 価格改定のお知らせ

ハスミワクチンカートリッジタイプに使用する“ディスペンサー”の価格改定についてお知らせ申し上げます。

昨今、主要原材料などの高騰が続いており、原材料費や製造コストなどの負担が大きくなっております。当クリニックでも、価格維持に努めてまいりましたが、現行の価格を維持するのが困難な状況となりました。

そこで、誠に不本意ではございますが、ディスペンサーの価格改定を実施させていただきたく存じます。

◆ 現行価格 8,800 円 → 新価格 11,000 円

2024年3月1日処方分より新価格を適用させていただきます。何卒、余儀ない事情をご理解いただき、今後とも変わらぬご高配を賜りますようお願い申し上げます。

ディスペンサーを返却いただいた場合は、お代金を返金させていただきます。また、長年使用すると、バネが緩くなり、白い注入ピストンが固定されなくなる場合がございます。その場合は新しいディスペンサーと交換いたします。ディスペンサーに関する連絡・お問い合わせは、下記までお電話ください。

HASUMI 免疫クリニック TEL : 03-3239-8101



ディスペンサー

Column

2月はプロポーズの季節

2月の大イベントは——、“バレンタインデー”。日本では、女性から男性へチョコレートを贈って“思い”を告白する日ですが、これは1960年代にチョコレート会社などが組んだ広告戦略が定着したもの。海外では男性から女性へプレゼントを贈り、愛情や感謝を伝える場合が多いようです。

実はこの2月、しかも4年ぶりに“プロポーズに最高な1日”がやってくることをご存じでしょうか。それは2月29日。閏年だからこそ訪れる1 / 366日です。かつてイギリスでは、4年間のうちこの日だけは女性から男性にプロポーズすることが公認されており、男性がそれを断ると罰金を支払わねばならなかったというのです。想い人がいるにもかかわらず告白できないあなた……要はオリンピックと同じ。4年に1度だと思えば、がんばりませんか。2月が多くの愛で彩られると良いですね。



Illustration : はるうらら